

ヴ、と小さな振動を感じて鞆からスマホを取り出す。

画面に表示された「もうすぐ着きます」と書かれたメッセージアプリの通知に、自然と口元が緩むのが分かった。

仕事終わりの金曜日。ただでさえ軽い足取りが、今日はさらに軽い。すれ違うカップルもなんのその、私は浮かれた気持ちのまま待ち合わせ場所に向かった。

「どこだろ……」

待ち合わせ場所は駅前の時計台のあたり。どんな服で行くかは伝えてあるし、事前に顔写真も交換済み。他人の写真を使つてるとか、別人級の加工がなされているとかでなければすぐに見つかるはず。そう、今日会うのはマツチングアプリで知り合った男の人なのだ。

彼氏に浮気されて別れたあと、友達の勧めで始めてみたアプリ。真剣に恋人を探している人が多いと聞いていたけど、実際はやり目も半分くらいはいた。あの人——元彼もそうだけど、どうしてそんなにしたいのだろう。好きな人と触れ合うことは心地良いけど、行為自体は痛いし恥ずかしいし、そんなに良いものではないのに。

うんざりして、辞めようかな……と思った時にマッチングしたのが今日の待ち合わせ相手である「Kさん」だ。

誰でも知っている大企業の営業主任、28歳。高身長で、交換した写真を見る限りかなりのイケメン。プロフィールでは年齢と身長以外の情報が伏せられていて、遊びでやってる人かな？　と想ってた。だからこそ、やりとりの中で明かされた素性には驚いた。詐欺？　と警戒した時もあったけど……、でも話は合うし、優しいし、物知りだし、もう何回か通話もしたし……。

文字のやりとりから感じる気遣いや、声の優しさ、もうそれなりの期間続いているメッセージ。対面じゃないからって、お互い結構深い話もした。そ

れが全部嘘だなんて思いたくはなかった。

小さく息を吐いて時計を見上げる。約束の時間まであと10分。

「――すみません」

後ろからかけられた声に振り向く。そこには長身の男が立っていた。

「あ、えっと……K、さん？」

「はい。よかった、あつて。初めまして……は変ですね。お疲れ様です、  
“まゆ”さん」

ふ、と安心したように微笑む顔は写真の通りだった。

ちゃんとセットされた長めの黒髪、少しでも吊った目尻に反してわずかに下がった眉を彩る黒縁の眼鏡がよく似合っている。

グレーのスーツを隙なく着こなしていて、聞いていた身長から想像していた姿よりもさらに体格が良く見えた。

「待たせちゃいましたか？」

「や、そんな。私が勝手に早く来ちゃっただけだし、それを言ったらKさんだって……」

ちらりと時計を見上げる。まだ約束の5分前だった。

同じようにして時間を確認したKさんが小さく笑った。その顔が照れたように見えるのは、都合よく捉えすぎているだろうか。

「本当ですね。すみません、楽しみにしてたからつい」

——う、わ。

だめ、それはずるい、反則。心の中でそう思うと同時に胸がきゅんと甘く鳴った。

顔が赤くなっている気がして頬に触れる。するとKさんが揶揄うような口ぶりで言った。

「あ、まゆさんもそうだった？」

「え」

「俺は会うのが決まった日からずっと楽しみにしてたんだけど……」

そう言いながら細めた目で見下ろされて、私はうなづくことしかできなかった。

「……私も楽しみでした。すごく」

Kさんは満足そうに笑って、さりげなく私に向かう方向を示しながら、

「よかった。行きましょう、今日の店は自信があるんです」

そう言ってゆつくりと歩き出した。



「だから、浮気は最低なことだと思っすっ！」

中身が半分ほどになったグラスを置いて、私はもう何度も繰り返した言葉を口にしました。

向かいに座っているKさんはそんな私に嫌な顔ひとつせず、相槌を打ちながら料理を取り分けてくれている。

予約してもらったのはお刺身が美味しいお店で、個室だから気兼ねなくおしゃべりができた。対面で話すのははじめてだから緊張しますね……なんて言い合っていたのに、お酒が入ったこともあってあつという間にいつもの空気がなくなった。Kさんは聞き上手で、話すつもりがなかったことまでしゃべってしまう。

ふと恋愛観の話になって、私は気になっていたことを訊いてみた。

「Kさんは、一途なタイプですか？」

「俺ですか？」

お酒を一口飲んだKさんが少し考えたあと口を開く。

「一途ですよ、かなり。と言うか重いかも」

「重いんですか？」

眼鏡越しに合った目がまっすぐこちらを見て、視線が絡んだ。

「自分ではそう思ったことはないんですけど……元カノたちが言うには、相当重いみたいです」

「重い？」

「俺的には好きになつたらもう離したくない、他の男を見てほしくないって感じなんですけど、それが無理って人が多くて。だからあんまり長続きしないし、フラれる側ですね。いつも」

「へえ……」

意外だなと思った。

選び放題と言ったら言葉が良くないけど、女性に執着するようなタイプにはとても見えないから。



そんな私に気がついたのか、Kさんは困ったように笑いながら首をかしげた。

「意外だなと思いました？」

「……思いました」

「よく言われます」

満足そうに微笑む目が優しく、息がきゅつと止まる。お酒が入ってから、Kさんはなんだか妙に色っぽくてドキドキする。こんなこと男の人に思うことははじめてだった。

——あの人もそうだったのかな。

グラスを傾けて残っていたお酒を一気に煽る。飲みやすいはずの甘いお酒が喉に絡んで苦しい。アルコールで頭が熱くなるのを自覚しながら、溜まった息を吐くように口を開いた。

「いいなあ」

「何がですか？」

「Kさんの元カノさんたち」

うつすらと涙でぼやけた視界で、不思議そうな顔をするKさんを捉えた。

「大事に、大事にしてもらえて、羨ましいです」

「まゆさん？」

「元彼なんて」

ああ、だめだ。そう思っているのに止まらない。

自分が思っていた以上に気が緩んでいて、誰にも話していないことまで口から滑り落ちていく。

「酔っ払ったあの子が色っぽかったから、って浮気して。しかも、同棲してた家に連れ込んでっ」

「……最低ですね」

「お前を抱いててもつまんないって、言われました」

まだ鮮明に思い出せる最悪の光景。ベッドにいた二人、散らばった服、濡れてシミを作っていたシート。

もやもやが込み上げてきて、自然と視線が落ちていく。美味しい料理が乗っていたセンスのいい食器たちを見て、自己嫌悪感まで湧いてきた。せっかく会いたかった人にあってるのに、私はなんてことを言ってるんだろう。

顔を上げて、笑みを作って見せる。もう気にしてないと、そう自分に言い聞かせるみたいに。

「もういいんですけどね」

Kさんは何も言わなかった。不自然な沈黙に、後悔の念がじわじわと胸に滲んでくる。

もうだめかも。完全にやらかした。いつもだったらこんなに吞まないのに、どうして今日に限ってこんなに吞んじやっただろう。

そんなことを言ってももう遅い。気まずくて目を逸らそうとした時、Kさんが口を開いた。

「……本当に、もういいと思ってます？」

「え？」

大きな手がテーブルの上に伸びて、私の手に触れた。指先をそっとついで、それから輪郭を確かめるようにしてなぞられる。

酔いが回って熱くなっていた肌をひんやりとした硬い指が撫でる感触は妙に生々しく、意識のほとんどが触れられている場所に向いた。

「元彼のこと。本当に、もう引きずってない？」

「……あ、えっと」

するり、彼の人差し指がすべって私の中指を捕まえる。

人差し指で優しく絡め取ったまま、親指が擦り付けられた。爪と肌の境目、関節、指の腹、まるで味わうみたいにじっくりと撫でてくる。

「っ」

「ね、どうなんですか？」

「そ、それは……」

かり、と軽く引っ搔かれて肩が跳ねた。ただ指を触られているだけなのに、  
どんだん変な気分になってくる。少しずつ肌が敏感になって、ただでさえ回  
らない頭が更に使い物にならなくなっていく。答えなきや、そう思うのに言  
葉が出てこない。Kさんの指の動きばかりを気にしてしまう。

「教えてください、まゆさん」

レンズ越しの目にまっすぐに見つめられて、息が止まる。

——どうしよう。

今の今まで気にしていた元彼のこと、本気でどうでもよくなってしまっ  
た。元彼なんかより、この人のことが気になる。なんて単純な女なんだろう。  
そう思うのに、顔かざるを得なかった。

「……もう、なんとも思っていない、です」

「よかった」

私の中指を軽く握ったKさんが微笑む。

甘い笑みに、安心したような声色。私への好意を感じてしまう雰囲気に頬が熱くなった。

「俺、本気でまゆさんのこといいなと思ってるんで。弱みに漬け込むのはちよっと気が引けると思ってたから、安心しました」

「え……あ、わ、そうなんです、ね」

「そうなんです。だからさっき、いいなあって言われた時嬉しくて」

ゆったりとした調子で話す間も、ずっと指同士は触れ合っている。

すり付けて、なぞって……指の股のところも、手のひらも自然な仕草で触れられる。くすぐったさと心地よさの加減が絶妙で、どきどきが止まらない。

ついに何も言えなくなって黙ってしまおうと、指を絡めて手を握られた。

「まゆさん」

「は、い……」

「手、触られるの好きなんですか？」

「そういうわけじゃ、ないんですけど……。こんなふうに触られたの、はじめてで……」

「こんなふう、って？」

親指がすりすりと指の側面を撫でる。

——っ、ずるい、分かっててやってる……！

すっかり敏感になった私の手は、もうどう触られても彼の感触を追ってしまっただけでなく、もっと触って欲しいとさえ思うようになっていた。それを見透かしたような目が、意地悪く笑う。



「えっちな顔してますね」

「してな……い、です」

「嘘」

「ひゃっ」

油断していた手のひらを、かりかり♡と甘く引っ搔かれて声が上擦った。猫の顎の下をくすぐるような動きは止まらず、甘痒い刺激に自然と肩に力が入って俯いてしまう。

「——……っ♡」

「ほら、してますよ。えっちな顔」

「そんな……っ」

口では否定するけど、それは恥ずかしさからであって本心ではない。

お腹の奥の方がずんと重くなって、甘い疼きを感じる。もっと触ってほしい、なんてそんなこと思っちゃだめなのに。

——むらむらする、って、こういうことなの？

ただのじゃれあいでこんなことを思うのが申し訳なくて、思わず顔を背けた。すると簡単に手が離されて。

「あー……まずい。ごめんなさい、もうやめておきます」

「……えっ？」

Kさんの方を見ると、気まずそうに眼鏡の位置を直している。

空っぽになってしまった私の手はテーブルに乗ったまま。急に取り上げられた体温が恋しくて、動かせない。どうしたんだろう、そう思っていると、

「やり目だっと思って思われたくないんです、本気でまゆさんのこといいなって思ってるんで。だから今度もっちゃんとした状態で、また会いましょう」  
「もっとちゃんとした……？」

意味がよく分からなくて首をかしげると、Kさんが眉を下げて笑った。けれど、その目の奥には真剣な色が見えていて、軽い調子の声とは裏腹に鋭い熱を感じた。

「お互い酔ってない時ってこと。今このまま触れてたら、抱きたくなる」  
「抱き……っ!？」

「そう。ホテルに連れ込んで、朝まで」

唇には薄い笑みを浮かべているけど、その目は変わらず熱を孕んだままで、この言葉が嘘じゃないということが分かる。情欲をたたえた瞳が私を捉えて

離さない。見つけた獲物に今にも飛びかかりそうな、そんな雰囲気すらある。今までの紳士的なKさんとは打って変わった気配にたじろぐ。こんな目で男の人に見られたことなんて、ない。

——でも。

全く嫌じゃない。むしろ、

「あ、の。わたし」

あんなに飲んだのに、口の中が渴ききるほど緊張してる。だってこんなことを自分から言うのなんて、生まれてはじめてだから。

目は合わせられないし、声はどんどん小さくなる。それでもこのまま帰りはなかった。

「Kさんと、まだ一緒にいたい……です」

一瞬の沈黙が落ちて。

「——出ましょうか」

私はKさんに腕を引かれる形で店を後にした。

♡  
♡  
♡

「ん……っあ、は……♡」

「は——……、ごめんなさい、もう我慢できなくて」

「あ、ッ……んん、う……っ♡」

部屋のドアを閉めてすぐ、腕の中に閉じ込められた。

ほとんど真上を見るような形で唇を奪われて、息ができない。酒臭い息を弾ませながら、私は熱っぽいキスに懸命に応えた。

Kさんの左腕は私の腰をがっちり抱いていて、右手は顎を掴んでいる。分厚い舌を押し込まれて、ぬぢぬぢ♡ と咥内を舐られると首の裏が甘く震えて、呼吸ができないことすら心地いいと感じる。

ぬる……♡ れる♡ れえ……♡

ぬぢ♡ ぐぢゅ……♡

「は、あ……♡ あ♡ ん……ッ♡」

「可愛い。キス、好きですか？」

「す、き♡ あ……え♡ はあ……っん、ん♡」

酔っているせいなのか、それともKさんが上手いのか。

舌を絡めただけで頭の芯がぼうつとして、じんじんと痺れている。顎を掴まれているから顔を逸らすことはできなくて、だらしなく口を開けて呼吸に喘いでいるところを見られてしまう。

「やらしい顔……、ふー……♡　ねえ、元彼ともキスだけでこんなエロい顔してたんですか？」

「あ♡　んあ……♡　し、てない……っ♡」

「本当？　舌の表面をこうやって……舐めただけで、とろとろになってるのにな？」

「はあ、っえ♡　あ——……♡」

人間、口を開ければ舌が垂れるようにできていて、口を閉じることができない私は当然舌が無防備に晒されている。犬みたいに垂れたその表面を、Kさんの分厚い舌が、れろお……♡　なぞる度に、喉の奥から震えた声が出

る。

恥ずかし、い……♡ あ♡ れりゆれりゆ♡ されるの、きもちい……♡  
唇は時々掠めるだけで、舌だけが常に触れ合っている。べっとりくっ付  
けて、すり合わせて、擦られて……♡

「っは♡ はあ、あ♡ んあ……あっ……♡」

「……ああ、涎垂らしちゃって。汚れますけど……どうします？」

「ふあ……♡ ん、ん……」

開けっぱなしの口からぼたぼたと垂れた唾液が、ちょうど胸の辺りに落ち  
ている。きつと小さなシミになっていると、肌に触れる布の感じから分かっ  
た。

私を見下ろす瞳は静かで、でもそこに確かな欲情と甘さを感じて目が逸ら  
せない。彼が何を言いたいのか、私に何を望んでいるのかが不思議と分かる。



私はKさんのシャツを握るようにして縋りながら言った。

「……脱ぎ、たいです。服、脱ぎ………たい………♡」

「脱ぐんですか？　ここで？」

「うん……」

優しく訊かれてうなづく。どうしてそうしたいと思うのだろう。

——酔ってる、から？

言うことをきくことが、彼の思い通りに動くことが、たまらなく心地よくて、胸が満たされて——そして興奮する。

正解の印のように、ちゅ♡と音を立てて舌にキスをされて、びくりと肩が跳ねた。

「いいですよ。自分で脱げますか？」

そつと体を離されて、まるで子どもに聞くみたいに言われる。ふう、ふうと上がる息を整えながらブラウスとスカートを床に落とした。今日のために下ろした白いレースの下着が、室内灯の控えめな灯りの中で浮く。まだベッドにも辿り着いていないのに肌をあらわとする恥ずかしさに、今更顔が熱くなった。

「あれ、恥ずかしくなっちゃいました？」

「やあ……」

「や、じゃないでしょう？ キスただけで欲しくなったのは自分なんだから」

「それは……、……だって、汚れちゃう、から」

一歩分離れた距離が寂しくて、心細さから言い訳をする。

体の内側まで見透かすような目が、レンズの向こうで意地悪く笑った。

「涎、垂らしちゃってましたもんね。……でも、それなら上だけでよかったでしょ？」

「あ……っ♡」

すり♡とお臍の下を撫でられて、大袈裟なほど腰が跳ねた。

——ッ♡ 恥ずかしい……っ！

彼の言う通りで、何も下まで脱ぐ必要はなかったのだ。なんで気が付かなかったんだろう。もう遅いと分かりながら、足をぴったりと揃えた。

「それとも、こっちも汚れそうでした？」

「ひ……っちが……♡」

「本当に？ 確かめてもいいですか？」

何か言う前に、太腿の間に手が差し込まれる。手のひらが下着の上からそこを撫でると、

……くちゅ♡

「ひゃ……っ♡」

「濡れてません？ これ」

「ち、がう……う……♡」

「違うないでしょう。こんなに熱くして……キス、大好きですもんね？」

ずりずり♡ 手のひらがこすり付けられて、じんわりと熱が広がっていく。にちにち……♡ 粘着質な水音は隠せなくて、彼の言う通り、キスだけで濡らしていることはもう明白だった。

「は♡ あ♡ あ、あ……っ♡ やだ、こす、っちややだ……あ♡」

「やだじゃない。ほら、こっち見て」

「ん、ん——……っ♡」

いつの間にか壁に追いやられていて、逃げられない♡

背中を壁につけて顔は上に。足は男の手を受け入れる分だけを開いて、深く重なる唇に呼吸の自由を奪われる。

すりすり♡ ずり、ずり♡ もにゅ、ぐにゅ……♡

ぢゅ……っ♡ れる♡ れりゅれりゅ……♡

「お♡ つは、あ♡ あ——……♡ んあ、は……あ♡ んふ、ッう……

♡」

「は——……♡ まゆさん、口ちっちゃいですね。全部、簡単に舐められる……」

「はあ、お♡ん♡ん♡ん……う♡」

舌の根本からずろお……♡ と絡め取られて、口の中が二人の唾液でいっぱいになる。

時々かかる熱い、お酒の匂いの息がえっちで興奮がすごい……♡  
下着越しにしつこく撫でられたおまんこが熱くて、もっと触って欲しいと下腹部が疼いて仕方がない。えっちなんで、今まで誘われて仕方なくするものだったのに……♡

「……はは、すごい。ぐしよぐしよですね。まゆさん、えっち好きなんだ？意外です」

「んあッ♡ あ♡ちが……っあ♡♡好きじゃ、ない……っい♡」

「嘘はよくないですよ。好きじゃないなら、初対面の男とホテルなんて来ないし、キスだけでこんなに濡らさない」

「んお♡ あッ♡ あん、ッ♡ほんと、に違う……の、お♡」

大きな身体に追い詰められて、言葉でもなじられる。

逃げられなくて、逆らえなくて怖いはずなのに、どうしてこんなに興奮するの……♡

下着の中に入ってきた手が直接おまんこを撫でる。ぬるぬると指がすべって、それを辱めるように割れ目をくちゆくちゅ♡ 弄る。

「何がどう違うんですか？　こんなに濡らして……素直に言えばいいのに。俺は別に怒ったりしませんよ。まあ……面白くはないですけど、今から俺だけにこうなるようにしたらいいだけだし」

「ッあ♡ んあ♡ お♡ こんな、……っあ♡ こんなに濡れたこと、ない

……っ♡ やだ……っあ、音、恥ずかしいから、いや……、……っ♡」

水を弾く音に思わず目を閉じる。ただ割れ目を擦られているだけなのに、音が鳴るほど濡れているなんて、恥ずかしくてたまらない。

ぴたりと動きが止まって、Kさんが黙り込む。不思議に思った瞬間、ぬるりと指がすべって、そのままクリトリスを撫であげた♡

「ひっ♡♡」

「それ、本当ですか？ こんなに感じやすいのに？」

「ほ、んと……っ♡ んお♡ えっち、痛くて……っ嫌いなのに……♡ 今日、へん♡ おかしく、なってる……ッ♡ あっ♡ ああ♡ なでなで、やめて……え♡」

ぬるぬる♡ ぬちゅ♡ くるくる……♡



ぬりゅぬりゅ♡　くちくち♡

知らないうちにぷっくり♡　膨らんだクリトリスを撫でる指は止まるどころかより熱っぽく動き、クリ裏を何度もこすり上げてくる。

お♡　お♡　なんで♡　勝手に腰、動いちゃ、う……♡

指が離れそうになると腰が前に出て、行かないで♡　と指を追いかける。下着の中なのだから、そこまで離れるわけなんてないと分かっているのに……♡

「——……ねえ、それわざとですか？　それとも天然？」

「っう、う？♡　あ♡　ああ……ッ♡　ん♡　ん♡」

「今日だけ、えっち好きになったんですか？　ねえ、それってなんで？」

「んあぁッ♡　お♡　ッあ、んん——……ッ♡♡」

ぐっと腰を抱き寄せられて、さらに距離が詰まる。

下着の中でそれを弄る指は止まらなくて、下半身が言うことを聞かない。足は勝手に開いていくし、抱かれた腰は前に出るしなくなって指に媚びている。

鼻の先が触れ合いそうな距離にある顔は真剣で、けれど欲情だとか、何かもっと強い欲を堪えたように見えた。

「ね、まゆさん……教えて？　なんでいつも嫌いなえつちが、今日は好きなんですか？」

しししこ♡　ぢゅこ♡　ちゅこちゅこ♡  
ぬりゅ♡　ぬりゅん♡　ぢゅこ、ぢゅこ♡♡

「ッお♡　あっ♡　あん、んッ♡　はッ♡　うう、づ——♡♡ッ♡♡」

二本の指で挟まれたクリトリスを扱かれる♡

や♡ なにこれ♡ やばい♡ やば、い……ッ♡

強すぎる刺激に自然と涙が滲んで視界がぼやける。何かに捕まっていないと立ってられない。私はKさんのシャツをきつく握りしめた。

なんで今日だけ好きか、なんて分かりきっている。そんなの。

「け、えさんっ♡ けーさん、にっ♡ してもらうの、きもち、いい、から

……ッあ♡ お♡ お♡ やだやだ、ッあ♡ なんか、きちや……ッ♡♡」

「あ——……、やば。無理でしょ、こんなの。このままイッて？ ね、見せてくださいよ。俺にイかされるところ。できますよね？」

「なに♡ な、……ッああ♡ あ♡ んぐう——ッ！♡♡」

びくッ♡ びくんッ♡ がくがく……♡ ひく……っん♡

「ッ？♡ あ、あ……っ……？♡」

なに♡ 今、なにが……っ♡

気持ちよさの限界が来た、と思った瞬間、視界が弾けて全身が大きく跳ねた。

頭が真っ白になって理解が追いつかない。ただ指の先まで痺れるくらい気持ちいい……♡

「……あれ、どうしました？」

「う、あ♡ なに、今のなに……っ♡」

「え……、はは、本当に初めてなんですね」

はあ……♡ と満足そうなため息が顔にかかる。

今から喰らう獲物を前にした肉食獣みたいな、そんな顔。愉悦が滲む笑みで見下ろされて背中がぞくりと震えたのが分かった。

「可愛い。分かんないですよ、今自分がどうなったのか。もう一回しみましょうか、今度はちゃんとッそう”なる前に教えてあげます”」

「ん、え……ッあ♡ ああ、あ……ッ♡ んぐッ♡ う——……ッ♡♡」

ぢゅう♡ と深く唇に吸いつかれて返事ができない。

言っている意味は半分も理解できなかったが、今から何をされるのかはよく分かった。

「は……、まゆさん。ここが何かは流石に分かりますよね？」

「ッは、あ♡ あ♡ あッ♡ くり♡ くりと、りす……ッ♡ んぐ♡ 捏ねるの、だめ……っえ♡ お♡ んお♡」

「違いますよ。こんなにパンパンに勃たせて……抜けるじゃないですか」  
「んおッ♡ お♡ ああ♡ ツそれ、だめ……っえ♡ お♡ しこしこ♡  
やら、あ♡」

ちゅこちゅこ♡ ぢゅく♡ ぬぢゅ♡ 淫らな音を立てて抜かれる。

硬く張り詰めたクリトリスは彼の言うとおり、指で挟んで抜けるほど勃っていて、じんじん♡ と熱を持って疼いて苦しい。触ってもらわないと辛いのに、触られると突き抜ける刺激の強さにじっとしてられない。支えられている腰が前に出て、強すぎる刺激に怖気付いて引けてしまう。結果、へこ、へこ♡ と不器用に腰を揺することになって……♡

「腰まで振ってる。ここを抜かれて気持ちよくなって……腰へこまでしてるんですよ？ もうこんなのクリトリスじゃなくて、ちんぽでしょう。クリちんぽ」

「ッあぁ♡　っふう、ッ♡　ちが……ッあ♡」

「え？」

「んお、おッ♡　あッ♡　あお、ッ♡♡」

ぎゅ♡　と指で強く挟まれて、腰がびくんッ♡　と前に出る。

根元を圧迫したまま、ゆすゆす♡　されると頭の芯が痺れて「おッ♡　お♡」ってひどい声が喉の奥から溢れた。

これだめ♡　知らない♡　こんなに気持ちいいなんて、知らない……っ♡　自分の体なのに、何も分からない。女の身体でいながら、女の身体のことなんて何も知らなかったのだと思い知らされる。

「まだ分かりませんか？　ほら、ちんぽみたいに扱けてるでしょう。気持ちいい？」

「ッふ、ぐ♡　きもち……っ♡　あッ♡　あ♡」

「言って？　“クリちゃんぽきもちいい”　って。言えますよね？」

「んあぁ……ッ♡♡♡  
ひッ♡♡♡  
ッだめ、……え♡♡」

ちゅこちゅこ♡  
ちゅこ♡

しこしこ♡  
ちゆく♡  
ちゅこちゅこ♡

指で挟まれたまま何度も扱かれて、頭を掻きむしりたくなる快樂に責められる。

アルコールで緩んでいる理性が溶け出して、与えられる快楽と彼の声だけを追いかけて縋りつく。腰に力が入って、呼吸が浅く喘いで込み上げてくる衝動に抗えない。

溜まりに溜まった快感が弾けそうに息を止めた瞬間、

「ツツツ！♡ あっ……あ、あ、なんで……っ♡」



「だって、言う前にイキそうだったから」

ぱっと指が離れて一切の刺激を取り上げられる。

狭い下着の中からずるりと手が引き抜かれてしまえば、ただひんやりと濡れた布がそこに張り付くだけ。そんなものでこの衝動が解消されるはずもなく、泣きたくなった。

「そんなに可愛い顔をしないでください。もっと虐めたくなる」

すり♡ 下着の上から撫で上げられて、すっかり悦びを知った身体は簡単に期待してしまう。

壁に追い詰めた私を見下ろす顔は愉しげで、例えるなら弱った獲物を弄ぶ肉食獣のようだった。

「ちゃんと言えたらイかせてあげますよ。言えますよね、　　クリちんぽイかせてください”　って”」

しれつと要求が増えていることに気が付きはしたが、それを指摘する余裕なんてもうない。

とにかく触って欲しくて、もう一度あの快楽で頭が真っ白になる感覚が欲しくてしょうがない。私は濡れた下着に手をかけると、それから片足を引き抜いてぐっしりと濡れたそこを晒した。

「……………　♡　ここ……………、…………クリちんぽ、イかせてください……………　♡　お　も、う……………欲しい、クリちんぽ、イキたい……………♡」

「……………はは、すご。まゆさん、やっぱりすごいエロい。えっち嫌いだったとか、元彼は何してたんだか」

「おッ♡　あッ♡　んあぁ……………ッ♡　お♡　おッ♡」

腰を強く抱き寄せられて、もう片手でクリちんぽを捕まえられる。焦らすことなくすぐにちゅこちゅこ♡ 抜いてもらえて、背中が震えるほどの甘い快感に満たされた♡

「可愛い顔。俺、まゆさんのその顔大好き。はー……♡ ねえ、今日だけで終わると思わないでくださいね」

「んぐ♡ ツう♡ お、お♡ んだ——……♡ ツ♡」

お酒の匂いを纏った甘ったるい声で囁いて、そのまま深くキスをされて上手く息ができない。

ほとんど真上を向くような形で口の中をぐちゅぐちゅ♡ 犯されながら、下は手加減なく責めたてられる。

いく♡ いぐ♡ いくいく♡ クリちんぽいく……♡ ツ♡

しこしこ♡ ちゅく♡ ぐちゅ♡  
ぬりゅぬりゅ♡ ぢゅこぢゅこぢゅこ♡

「ッお♡ んんづ、——〜〜……ッ!♡♡」

びくッ♡ びくびくッ♡ び……ッくん♡  
がくがく……♡ へこ♡ へこ♡

「——……♡ ……は、あ。すっごい震えてる。大丈夫ですか？」

「はあ……っあ、え……♡ え、あ♡ あ——……♡」

「口も効けなくなっちゃった？ ……よかった、それくらい気持ちいいんですね」

視界がぱちぱちと弾けて頭が回らない。

寸止めの先に得た絶頂は想像以上に深く、まだ指の先が痺れている。下半身が言うことを聞かず、私はそのままKさんにもたれかかった。お酒の匂いに汗と、香水のような甘い香りが混ざっていて心地いい。

快感を引き延ばすためか、まだぬるぬると割れ目とクリちんぽを撫でて、手に甘えて腰が揺れる。交尾を覚えたばかりの動物みたい……♡

「俺にここ触られるの好き？」

「お……♡ しゅ、き♡ は♡ んは、あ……♡」

「素直でいいですね。もっと気持ちいいこと知りたくないですか？」

もつと。その言葉にぴくりと反応してしまふ。

今でさえこんなに、自力で立ってられないほど快いの、これ以上なんて……♡

そんな胸のうちが透けて見えたのか、Kさんは眼鏡の奥にある目を満足そうに笑みの形にした。

「ベッド行きましょう。あと、もうひとつ」

耳たぶに唇が触れて、掠れた低音が甘やかに響いた。

「名前——……圭吾、って呼んでください、まゆさん」

明かされた名前を反芻するより早く、その腕に抱き上げられた。